

主第五代毛利駿河守高久家来、小林九左衛門と下野村へ現在佐伯市鶴岡へ文庄屋深矢治左衛門時真によつて、小田井堰は、千辛万苦の末完成しました。

旧鶴岡地方は、広い耕地に恵まれながら、灌漑(農業用水)不便で、水田が少なかった。畑地と水田に改良するたため、井堰が設けられました。

佐伯市と西に五キ半、弥生町大字小田付道と流れる番五川に、長い横堰を築いて、更に、佐伯市大字鶴岡に至る延長四千四百余メートルの水路を造りました。現在、国道一〇号線、二一七号線に沿つて、小田井路が改修されてあります。

元禄四年以降、大庄屋深矢治左衛門時真、深矢治左衛門時時、そして文政九年佐伯藩主第十代毛利出雲守高翰の頃、玄瀬張三兵衛等によつて、大改良が続行されていきます。

明治二十三年にも大修理を試みています。

「：：鶴岡村ニ談判、相調、費用ヲ分担ス。其ノ註トシテ上野村長、議員、大字小田付長、世話掛、井手守等記名ス。」

上野村長出納徳佐、議員兼任長加藤五年治、議員山口金三郎、世話掛石井弥五六、加藤吉蔵、加藤銀四郎、井手守加藤澄夫

鶴岡村任長 今山幸太郎、伊達松治、廣瀬金太、高治操一、大鶴広三、高治優三、伊達今朝吉、藤田小八、高治保五郎、高治茂三郎、沢倉松三、井手守佐藤勇二、玄瀬元五郎、仲尾慶三、工事請負人袋野慶三、石工今山権、

と刻み込まれている記念碑(石碑)が、国道二一七号線大分バスのりば番匠付近に建立されていますが、苔むして、まが腐蝕され、文字も読みづらくなっています。

石碑を眺めるたびに小田井堰の維持管理に、いかに先人が努力されているかがわかれ、そこには弥生町と佐伯市が強い結びつきを感じ得ることができます。

鶴岡地方登壇の基礎は、小田井堰に負うところが甚大だといつても過言ではありません。(おわり)

郷土史誌

中の谷こそ泣く谷よ

会員 中村由子

(弥生町 長)

生存してはいたが、今年九十八歳になる母から、私が幼ない頃、發度か聞かされた話である。

まだ、洗車や自動車がない時であった。村はランアかローソクといった時代で、どこへ行くにも、頼みになるのは、自分の足であった。その頃は、医者に診てもらった日は、お祈りの儀式で、それとても間に合えば良い方であった。

そんな時分の話である。どういふ経路でか、大分へ入院していた病人が死んだという。

さて、この死入を、弥生まで連れて帰らねばならぬこととなった。野衆が十人程、徒歩で大分へと向かった。

とにかく、中谷峠を夜ついで、越え去るものである。行きはそれでもよかったが、帰りには戸板に死人を載せての道中である。替るがわるかつきながら、ふもとまで来た。これからが中の谷峠である。山道はうっそうと草木が

茂り、中のせまい急勾配の山道を、汗をかきかき登った
そうである。

途中で、陽日落ち、山はとっぴりと暮れ、あたりは夜
の闇に一つまされた。何しろ白昼でも盗人が出るとか、死
人がいつの間にか消えていたとかいう話を、誰となく話
に聞いていたので、死人の胸元には、魔除けの刀をのせて
て、いつ何がおそってくるかも知れないと、時々空へ向
けて鉄化で、バーンバーンと空砲を放ちながら、夜道を
急いだようだ。全く生き心地もせず、難所中の難所と
言われた中の谷を、それこそ死にもの狂いで越したとい
い、「中の谷こそ泣く谷よ」と、そんな言葉でむすんで
話してくれたことであつた。

またある時は、中の谷の手前で日が暮れたが、大膽に
一人で峠を越した人の話も聞いた。

ふもとの村人が、「今からだと夜になるで——」と引
止めたらしいが、「なまは、急げば何とか越せるたろ、う」
と答えて登り始めた。

しかし、日が傾きかかると夕暮れは早く、山はすぐ夜
になる。くらやみをしぼらく歩いたが、道を迷つては大
変と、墓を見つけたのをこれ幸いと、「一晩の伴をさせ
てくれ」と墓に話しかけ、疲れも出たので、そのまゝ墓
にもたれて、グッスリ眠ったという。「昔から、神社は
ケモノ類が騒がしいが、墓地は静かだ、といわれている
が、ま、たぐその通りであつた」と、その人が話したや
うである。

今でこそ自動車で、あつという間に通過してしまふ中
の谷であるが、昔は「ナカンタニ(中ノ谷)でなくて、泣
く谷よ」といわれていたやうである。
(おわり)

紹介 (その二)

羽出浦の歴史と民俗 「大分県地方史」連載中
— 賛助会員 安部弥右衛門老の大作 — (羽柴)

安部老は明治十九年十二月のお生まれであるから
ただ今九十二歳のご高令、漁村羽出浦の古跡をしら
べられ、庄屋古文書を丹念に読解、さらに漁村の民
俗を調査記録された。

それらは何十冊に整理され、昭和四十二年十二月以
来、この「佐伯史談」誌上に發表、数年間つづいた
ことは、古い会員はよくご存知である。

ところが、この安部老の著作が、県文化財専門委員
員深矢多岐男先生のお目にとまり、そのお手引きで
「大分県地方史」の每号に、今連載中である、年令
的には本会の最高第一人者で、誰と真似出来ないご
申業である。

「大分県地方史」は、幸いご惠贈されたとき、毎
号そろっている。とくに漁村会員のご覧をおすすめ
したい。

では、これまでお分けご紹介しよう。

研究ノート

羽出浦の歴史と民俗 「大分県地方史」連載

(一) 二十二年一月第八十七号

「安部氏は明治十九年生れか九十五(五冊)という高令ですが、羽
出浦の歴史と民俗について研究をすすめておられ、未発表の原
稿が、数百枚に達しているとのこと、本号はその一部を掲載さ
せて頂きました。……研究に対する情熱に、まことに敬意以外の
ものを持ちません。掲載については深矢先生男氏の方よりご協力
いただきました。(重田) 編集後記 (以下も同じ)

二十三年四月 第八十八号